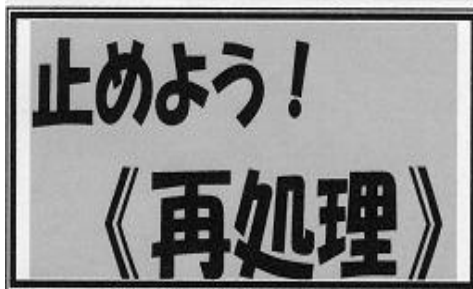


三陸の海を放射能から守る 岩手の会

ミニコミ通信 第43号
署名用紙は [ここに](#)あります

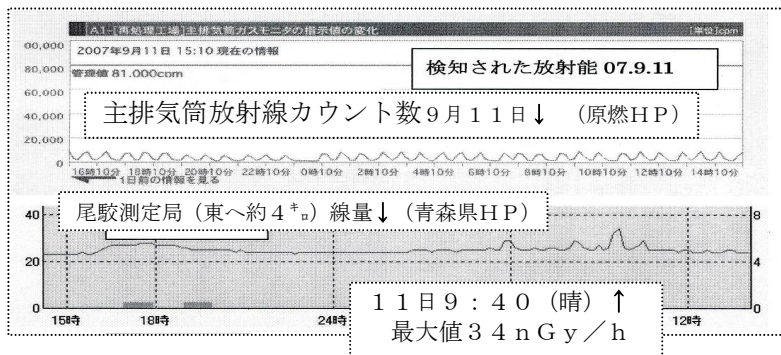
<http://homepage3.nifty.com/gatayann/env.htm>
《岩手の環境/R I 廃棄物/再処理》
http://briefcase.yahoo.co.jp/k_imag
《まった再処理分庫》



2007 (平成19) 年
9月 20日
編集事務局 S.Oshida
TEL・FAX 019-623-1636
郵便振替
02240-5-102650

耐震安全評価を待たず第4ステップ開始 モニターにせん断の波形

再処理工場の煙突（主排気筒）から、放射性ガスの濃度の高い数値が表示され始めたのは七日朝、台風九号が津軽半島を通過中でした。モニタリンググラフの波形の最大値は六千六百〇〇cpmほどあり、波形の最大値や波長が昨年度のものよりいくらか大きくなっています。これは、今回の使用済燃料は燃焼度が高く貯蔵冷却期間の短いものと推察され、昨年ものより溶けにくく、その分ゆっくりにせん断しているからと思われる。



台風九号の風と雨の中 放射性ガス排出

七日正午には、主排気筒モニタがこれまで最高の九二九八cpm

最高値九二九八cpm

日本原燃（株）は八月三十一日から六ヶ所再処理工場のアクティブ試験を再開し第四ステップに突入し、九月七日から使用済燃料のせん断作業を始めました。同社の「主排気筒ガスモニタ」には、七日午前二時半からせん断開始を示す「放射線カウント波形」が現れ始め十七日までに九〇体、約四〇トがせん断された模様。八月二〇日、原子力施設を持つ電力一二社は耐震性を検証し経産省に報告するとし、日本原燃は六ヶ所沖海底断層の再調査を行うとしましたがその結果も待たず作業が再開されました。

重茂漁協・生活クラブ生協が街頭署名



九月十一日、重茂漁協と生活クラブ生協の組合員が「放射能で海を汚すな」と訴え街頭署名行動をしました。盛岡・北上・水沢・一関で総勢六十二人の組合員が行動し、約二時間で合計六六四人の署名を集めました。



を示し、波形には様々な乱れや中断もあり、四苦八苦のせん断作業が推定されます。

尾ぶち測定局で 放射線探知

青森県が実施しているモニタリングのホームページのうち、再処理工場の東にある尾駮（お

ぶち）測定局では十一日午前九時三〇分に平常値より約一〇ナノグレイ/hも高い放射線の波形が現れました。（上図）その時刻は晴天であり降雨中のラドンなどとは考えられず、再処理工場の主排気筒からのクリプトンガスなどの放射線と推定されます。

〔編集手帳〕



再処理工場こそ 地震に弱いのでは？

「高レベル放射性廃液」が生まれる

使用済み核燃料をせん断し硝酸に溶かし、プルトニウムとウランを分離し取り出すと、あとには核分裂生成物や超ウラン元素を含む廃液が残る。それが「高レベル放射性廃液」である。濃縮してガラス固化体に閉じこめ、「液体よりは安全にする」という工程が、いよいよ第4ステップで行われる。しかしこの技術は完成されたものではなく、その工程自体に問題があるようであるし、さらに「ガラス固化体」にしたとしても、熱や衝撃、放射線の影響で変形やひび割れの可能性があり、永久に閉じこめられる保障はない。

冷却し攪拌し続けねば沸騰する！

六ヶ所工場には、これまでのアクティブ試験ですでに生まれた約80立方メートル(水なら約80ト)分だが、それよりもっと重いもの「高レベル放射性濃縮廃液」が、ガラス固化作業を待ちながら、工場内のどこかのタンクに貯蔵されている。この液は絶えず冷やし攪拌し続けなければ、たちまち沸騰しタンクから漏れ出す恐れがあるという。「人がそばに数10秒いるだけで死にいたる」という高レベル放射性廃液が漏れ出すと、場合によっては地球規模の汚染になることが警告されている。

地震による停電が恐ろしい

フランスのラ・アーグでは1980年4月に、実際に停電によるタンクの冷却能力喪失事故を起こしている。「もう、溶液の沸騰が始まった」というところに、電源車が駆けつけて間一髪、冷却を再開し事故を免れたという。

「原発震災」は空想ではない

本年7月の中越沖地震で柏崎刈羽原発は、世界の原発・核利用の歴史上初めての「原発震災」に襲われた。7つの原発がすべて停止し(3基は点検休止中)、変圧器が火を噴いた。機器の変形やひび割れ箇所が2556件という。総計1400kmもの配管がある六ヶ所再処理工場は果たして大丈夫なのか？ (尚)

「岩手の会」など12団体質問状

=放射能の除去と海藻からのプルトニウム検出について=

原燃から回答

疑問はさらに深まる

七月三日私たち青森・岩手・宮城の十二市民団体が日本原燃に提出した質問状について、八月十三日文書で回答が寄せられました。

放射能除去装置をつけよ

まず「放射能の除去装置」に関しては「技術が完成していない、拡散するから安全だ」と書いています。低減化推進に係わる担当部署は不明であり、検討はすでに平成十五年で打ち切られています。安全協定の放射能低減化条項は単なるお飾りなのでしょう。青森県や六ヶ所村は安全協定の当事者として、原燃に協定の履行を真剣に迫るべきです。新型転換炉「ふげん」にはト

リチウムの除去装置が設置されていません。

「クリプトン85の回収技術はプラント規模で目処が立っている」と旧動燃(現核燃サイクル機構)のレポートにあります。既に技術があることには触れず、放射能を除去せずに操業を進めようとする姿勢は、住民の健康は二の次で、経済性追求を最優先していると思えません。

このような大量放出は、海や陸の生態系や地球環境へ影響しないのかと質問しましたが、答えはありませんでした。

プルトニウム検出値

訂正の経緯は？

原燃は昨秋調査した海藻中のプルトニウムは「不検出」と報告して

いましたが、六月十二日に、「0.01ベクレル/kg生」の間違いであったと訂正発表しました。

訂正された海藻のプルトニウムの数値は北海道、岩手産のこんぶに比べて約一〇倍高い値です。原燃回答は、この海藻は「チガイソ」であるとし、検出したプルトニウムについては、「プルトニウム238は検出されず、過去の核実験起源のもの」と断定しています。さらにこの測定値は国の原子力安全委員会への報告のものであり、青森県への報告義務はないとしました。

ヨウ素は何故調べないのか？

「海藻中の放射性ヨウ素を調べていないの

はなぜか」との質問に対して「検出できないと想定しているので測定しない」という答でした。現在でも時折原発濃度限度の数倍の放射性ヨウ素が海域に放出されています。都合の悪い項目をあえて測定しない姿勢が伺えます。

放射能海洋拡散のデータを示せ！

再処理工場は、既に海洋へ多量の放射能を放出していますが「その拡散状況をデータで示せ」という質問に対して、答がありません。

マリンスポーツへの影響

原燃は「アウトドアレジャーやマリンスポーツを行うことにより受ける線量は小さい値に

なり、人の健康に影響を及ぼすレベルではないものと考えます」と回答しています。子どもの海水浴や若い人の多いマリンスポーツの実態を把握して回答したのでしょうか。

疑問が解決されないまま、第四ステップ再開

「人の健康に影響を及ぼすレベルではない」と主張して、九月七日から第四ステップによる大量の放射能放出が始まりました。放射能を除去できない再処理は未完の技術であり、技術が完成するまで操業を見合わせるべきです。(詳細は当会ホームページに掲載中)

七月も七回放出 六ヶ所再処理工場

日本原燃(株)のホームページは 八月末に 七分の廃液などの放出状況を発表しました。アクティブ試験は休止中でしたが、廃液放出日が七日あり、トリウム十七兆ベクレル、ヨウ素129が二一五六億ベクレル、海洋に流されました。昨年三月のアクティブ試験開始以来流されたトリウムの総量は六二兆三兆ベクレルになりました。